

恋愛感情が視線行動に及ぼす影響

飯塚 雄一*・橋本 由里・飯塚 一裕**

概 要

実際の生活場面で相互に恋愛的好意感情をもっている者同士（DC群）と未知の者同士（UP群）の自然な会話場面における視線行動をVTRに収録し、観察者が行動分析器により直視量を測定した。実験計画は二者関係（交際中、初対面）と性を独立変数とする2要因の被験者間計画である。被験者は、交際中の男女学生18組と初対面の男女学生20組、計76名である。実験終了後、DC群にRubinの恋愛感情尺度を実施した。その結果、交際中の男女は相互に恋愛的好意感情をもっていることが確認された。また初対面男女についても、両者共、同様にほぼ中立的な感情をもっていることが確認された。分散分析の結果、UP群よりもDC群の男女の直視量が多いことが判明した。

キーワード：恋愛的好意感情、恋愛感情尺度、視線行動、直視量

問 題

Fehr & Exline (1987) は、まず現実にある実際の人間関係を選んで、その中での視線を測定するのが視線研究を意味深く進展させると述べている。従来の対人間の視線研究では、肯定的な対人感情を実験的に操作して作られた関係や状況において視線量を測定することが多かった。そこで本研究では、実験的に作られた関係性ではなく、実際に恋愛的好意感情をもって交際中の男女と初対面で未知の男女を対象としてとり上げる。また多くの視線研究が扱っている、実験協力者と被験者の相互作用ではなく、日常場面に近い状況で、二者間会話中における視線行動を検討する。

さて、実際に好意的な関係にある人々の直視量を検討した研究がいくつかある。Coutts & Schneider (1976) は、女子学生の友人同士と未知同士のそれぞれの会話中に、友人同士が未知同士より直視量と相互視量が多いことを見いだした。また、男女児童（7, 8歳）の相互作用場面でも、友人同士が未知同士より直視総

量（秒）が多いことが報告されている（Foot et al., 1977）。次にRubin (1970) は、強度の恋人同士（男女とも恋愛感情尺度 [love scale] で平均点以上を得た者）の方が弱度の恋人同士（平均点以下を得た者）より、待ち時間中に相互視量（強度 44.0%；弱度 34.7%）が多いことを見いだした。また男性より女性の直視量が多いことも見いだされた。しかし、強度の恋人同士と弱度の恋人同士の直視量について有意差はなかった。Goldstein et al. (1976) は、Rubinの追試的研究で、会話中に相互視総量（%）が未知の男女（25%）より恋愛感情の強い男女（52%）の方が多く見いだした。しかし、Rubinの追試を行った White (1975) は直視量と恋愛的好意感情の間に有意な相関を見いだしていない（Harper et al., 1978）。Beier & Sternberg (1977) は、51組の新婚夫婦（3-6か月後）に結婚適応度調査（Discord Questionnaire; 不和調査）を実施し、適応度の異なる夫婦を面接観察した。その結果、うまくいっている夫婦はうまくいっていない夫婦より相互視の回数、平均時間が多いことを見いだした。Guerrero (1997) は、恋人、同性友人、異性友人のNVBを比較し、恋人同士が、同性・異性友人より視線量が多いことを見いだした。

* 島根県立大学短期大学部（名誉教授）

** 愛知教育大学

しかしこの研究では視線量が7段階評定で調べられており、実際の視線量は測定されていない。

Russo (1975) は、幼児、児童の会話場面で、友人同士と未知同士の間に相互視総量(%)に有意差を見いだしていない。Rutter & Stephenson (1979) は、新聞の募集広告に応じた男女大学生で、同性について実際の友人同士と未知同士の会話場面を分析した。その結果、友人よりも未知同士の間で相互視総量及び直視量(総量, 平均時間)と聴取中の直視総量が多いことを報告している。発話の分析結果では、友人同士は未知同士より発話が短く回数が多く、発話量は友人同士より未知同士の方が多くなっていた。また、沈黙時間は友人同士が多かった。すなわち、友人同士はお互いの考え方などを既によく知っているので特に多く話す必要がないのである。Pennington & Rutter (1981) は、11歳の男児、女児をソシオメトリック・テストで友人同士と未知同士に分け、各ペアに3分間の会話をさせ、視線量と発話量を測定した。その結果、友人、未知関係によって視線量、発話量共に影響を受けなかった。また和田 (1989) は、友人同士より未知同士において直視回数が増えることを見いだしている。市河・車谷・香西 (1989) も、実際の友人同士、未知同士を比較しているが、相互視量と直視量に関係性要因の有意な主効果は認められていない。このように、現実の二者関係においても視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」(飯塚, 2005)の予測と一致する結果と一致しない結果がある。

前述の12研究のうち7研究は、友人同士と未知同士を比較している。二者関係(独立変数)による視線量の差を認めた研究が2つ、認めなかった研究が5つある。単なる友人同士と未知同士では独立変数の操作としては弱すぎたがために独立変数の効果が検出できなかったとも考えられる。さて、モデルは、好意感情の強さと直視量の間に正比例関係を予測している。これは、Rubin (1970) で強い愛情群が弱い愛情群より、またGuerrero (1997) で恋人同士が友人同士より視線量が多いことから支持されているといえよう。そこで、本研究では恋愛的好意感情を抱きあっている男女を対象に取り上げる。恋愛的好意感情では強い好意感情が予想さ

れるので、恋人同士と未知の男女を比較することで、より明確にモデルの検討ができると考えられる。日本では、恋愛関係の研究は調査を中心に進められており、恋愛関係の行動的特徴(視線行動など)の実験的研究は非常に少ない。従って、本研究の結果は恋愛行動の特徴についての知見に寄与することも期待される。

Ellsworth & Ludwig (1972) が言うように、視線行動においては原則として必ず性差が見いだされている。多くの研究で、女性が男性より直視量が多いことを見いだされている(Hall, 1984)。そこで本研究でも視線行動の性差についても検討を行う。

最後に、本研究では男女の会話中の視線行動を観察するので、視線と発話の関係についても検討する。視線行動は会話と密接な関係があり、会話の流れによって変化する(Kendon, 1967)。したがって、直視総量、相互視総量のような測度だけでは、会話の流れに基づく視線の変化を十分に反映することができない(吉田・飯田, 1981)。そこで本研究では、視線と発話の変数を測定して、2つの合成変数としての発言中の視線量と聴取中の視線量という視線分析測度を導入する。

さて以上の論点を踏まえて、本実験では次の3つの仮説を検証する。

仮説1 初対面の男女間に比較して交際中の男女間の相互視量が多いであろう。

仮説2 交際中の男女の方が初対面の男女よりそれぞれの直視量が多いであろう。

仮説3 交際中及び初対面の男女において、男性が女性に向ける直視量より女性が男性に向ける直視量が多いであろう。

方 法

1. 被験者

男女大学生(18~20才)76名(男性38名, 女性38名)が被験者である。被験者は、交際中の男女学生(Dating Couples: 以下DCと略記)18組と初対面の男女学生(Unacquainted Pair: 以下UPと略記)20組, 計76名である。女子短期大学の大学祭に来学した男女のカップルを対象にして実験を実施した。交際中の男女の交際

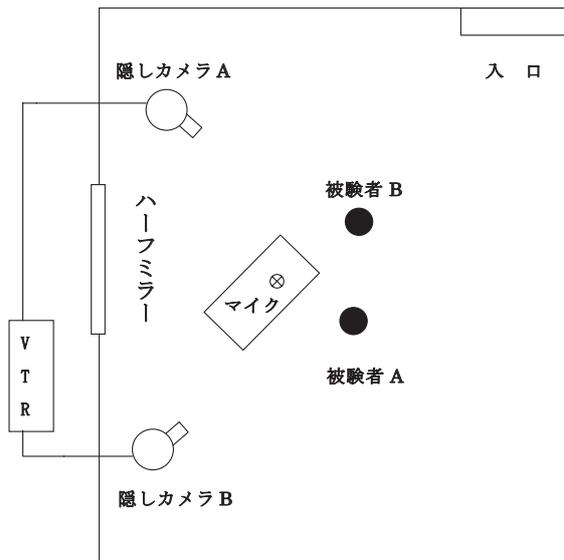


図1 実験状況

期間はそれぞれ異なるが、2か月～4年程度の範囲にある。被験者は2人1組で実験に参加する。

2. 実験計画

二者関係（初対面，交際中）と性を独立変数とする2要因の被験者間計画である。

3. 実験状況

男女の被験者は、約80度の角度でお互いに少し向かい合うようにして椅子に座って話す（図1）。相互視量は二者間の対人距離と関連している（Argyle & Dean, 1965）ので、距離は変えないように固定してある。具体的には、2つの椅子を床に固定した。2人間の距離は初対面，交際中条件とも約1.1mである。2人の会話は、机の上にあるマイクによってテープレコーダーに収録される。また2人の行動は、2台の隠しビデオカメラにより収録される。2台のビデオカメラによる映像は、特殊効果装置（SONY製）によって合成し、画面に2人が左右に並んでいるように収録される。

4. 手続き

実験者は、2人の男女被験者を実験室へ案内し、どちらの席でもよいから椅子に座るよう告げる。2人が座ると、実験者は次のような教示を行う。「私達は、今、若い男女の異性観につ

いて調べています。男女のカップルの方にここへ来て頂いて、しばらくの間、話し合いをして頂いています。なお、実際の生の意見がほしいので、話し合いを録音させて下さい。もちろんお名前や内容について個別的に公表したりすることはありません。集計が終わりしだい、内容は消してしまいますので安心して下さい。それではお話頂く前に、私は隣の部屋でテープレコーダーの準備をします。この準備に2分ぐらいかかりますので、その間待っていて下さい。準備が終わりましたらあのドアをノックしますので、その合図で話し始めて下さい。5分間くらいしたらまたここへ戻って来ますので、それまで話し合っていて下さい。それではよろしくお願いします。」この教示の後、実験者は隣室へ退室する。約2分後、実験室と観察室の間のドアをノックして話し合いを始める合図をする。さらに5分間経過後、再びノックをして話し合い終了の合図をする。実験者は実験室へ戻り、2人に質問紙を手渡しその場で記入してもらう。記入後、すべて終了した旨を告げて2人を退出させた。

5. 倫理的配慮

二人の話し合いの内容をテープレコーダーに録音することについては、会話を始める前に毎回説明し、同意を得た。実験に参加する男女の個人名や学校名などは問わないでプライバシーの保護に努めた。データ測定管理は番号で行った。データの保管は鍵のかけられる場所に保管し、データ分析の後は、録音・画像データの消去を行った。実験参加は自由意思に基づき、研究協力の如何に関わらず、個人や所属する学校が不利益を被ることはないこと、また、結果の学会発表および論文発表においても個人が特定されることはないことを口頭で説明し、同意を得た。実験終了後に、実験に関するディブリーフィング（debriefing）を行った。すなわち、実験は視線行動を調べる目的であり、ビデオカメラで二人の話し合いを撮らせて頂いたことを説明した。そしてはじめに、ビデオカメラで話し合いを撮ることを言わなかったのは、カメラを意識して二人の視線行動が影響を受けるのを防ぐためであったことを説明し、あらためて了

解を得た。

6. 実験後質問紙

1) 話題内容の難易度, 恥ずかしさ, 一般性, 及び視線

難易度に関しては, 「話の内容は難しかったですか, やさしかったですか」という内容に「非常に難しかった (7) —非常にやさしかった (1)」で回答する7点尺度であった。恥ずかしさに関しては, 「話の内容は恥ずかしかったですか, 恥ずかしくなかったですか」という内容に「非常に恥ずかしかった (7) —全く恥ずかしくなかった (1)」で回答する7点尺度であった。一般性に関しては, 「話の内容は一般的でしたか, 個人的でしたか」という内容に「非常に一般的 (7) —非常に個人的 (1)」で回答する7点尺度であった。視線に関しては, 「相手の目を見て話せましたか」という内容に「非常によく見て話せた (7) —全く見て話せなかった (1)」で回答する7点尺度であった。これらは項目別に分析した。

2) 対面時の気持ち

快い (7) —不快な (1), 「リラックスした (7) —緊張した (1)», 「いらいらした (1) —落ち着いた (7)», 「どきどきした (1) —おだやかな (7)」の4項目から成るSD形式の7点尺度である。これらは項目別に分析した。

3) 恋愛感情

DC群にRubin (1970) の恋愛感情尺度を翻訳して実施した。これは, 親和欲求, 援助傾向, 独占的感情という要素を含む13項目から成るリッカート尺度で, 被験者は特定の人物を挙げた後で, それぞれの項目に対して, 「全くそう思わない (1)」から「非常にそう思う (9)」に至る9点尺度上に評定する。13項目の合計点が尺度値とされるので, 可能な得点範囲は, 13-117となる。なお, 値が大きいほど恋愛感情が強くなるように得点化した。藤原・黒川・秋月 (1983) は, Rubinの尺度の日本語版で信頼性と妥当性を確認している。

7. 従属変数 (直視量と発言量) の測定

2人の被験者の直視と発話を同時に観察し記録するために, 1回のセッションで4名の観察

者 (測定者) が2名の被験者の直視と発話をそれぞれ1つずつ受けもつ。そして, 視線を担当する2名の観察者はハーフ・ミラーの後方で, また発話を担当する観察者はVTRモニターの前でそれぞれ測定する (図1参照)。視線を担当する観察者 (1) は自分が担当している被験者 (A) が, もう1人の被験者である相手 (B) の目の辺りに視線を向けている時にはスイッチを押して (on), 視線を向けていない時にはスイッチを離しておく (off)。同様に, 発話を担当する観察者 (2) は自分の担当している被験者 (A) が話している時にはスイッチを押して, 話していない時にはスイッチを離しておく。被験者2人の視線と発話は on-off パターンとして観察者が連続的に記録する。この on-off 信号が行動分析器 (竹井機器製) で処理される。この行動の連続は4つの状態としてチャートにプリントアウトされる。なお, 測定は実験者がドアをロックする合図で開始され, 約3分後のドアのロック音で測定を終了した。

観察者の測定は, 行動分析器により次の測度がプリントアウトされる。なお, 待ち時間と会話中は別々に測定した。①男性の女性に対する直視量, ②女性の男性に対する直視量, ③男性の発言量, ④女性の発言量。なお, ⑤男性の発言中の直視量, ⑥男性の聴取中の直視量, ⑦女性の発言中の直視量, ⑧女性の聴取中の直視量については次のように算出する。すなわち, ①と②より2人の相互視量を, ①と③より⑤を, ②と④より⑦を, ①と④より⑥を, ②と③より⑧を, それぞれプリントアウトされたチャートから算出した。具体的には, 例えば, ①と②より相互視量を求めるには, チャートで2人の直視が重なった部分を物差しで計り, その長さを時間に換算することで相互視量 (時間) を算出した。

結 果

1. 測定の信頼性

測定の信頼性は, 観察者間一致率によって検討した。すなわち, VTRに収録された男女の対面場面の中からランダムに4組を選んで, 複数の観察者が同一被験者の直視を測定し, そ

表1 相互視量の平均と標準偏差（待ち時間中）

測 度	初対面男女 ($n = 20$)		交際中男女 ($n = 18$)	
	M	(SD)	M	(SD)
回数 (1分当り)	5.48	(4.15)	7.22	(3.00)
総量 (%)	11.30	(9.00)	29.10	(18.30)
平均時間	1.11	(0.49)	2.30	(1.22)

表2 相互視量の平均と標準偏差（2分間の会話中）

測 度	初対面男女 ($n = 20$)		交際中男女 ($n = 18$)	
	M	(SD)	M	(SD)
回数 (1分当り)	6.43	(3.16)	8.53	(3.72)
総量 (%)	13.80	(9.20)	31.80	(22.60)
平均時間	1.25	(0.50)	2.04	(1.02)

の一致度をみるというやり方である。その結果、観察者間一致率は、男性の女性に対する直視総量で96%、女性の男性に対する直視総量で97%、男性の発言中の直視量で89%、男性の聴取中の直視量で87%、女性の発言中の直視量で94%、女性の聴取中の直視量で85%となった。

2. 実験後質問紙

DC群に Rubin (1970) の恋愛感情尺度を実施した結果、男性の平均得点は90.00 ($SD = 18.01$)、女性は85.67 ($SD = 14.08$)となった。得点間の有意差はない。これらの得点は、中点(65)よりも愛情高の極の側に寄っており、DC群の男女相互に恋愛感情をもっていることが確認された。またUP群について相手と対面している時の感情を「快(7) - 不快(1)」尺度(7段階)で評定させた。その結果、男性の平均値は4.85 ($SD = 0.99$)、女性は4.85 ($SD = 0.81$)となり両者共同様にほぼ中性的な感情をもっていることも確認された。実験後質問紙について、関係性(交際中、初対面)と性を要因とする 2×2 の分散分析を行った。この結果、話の内容の恥ずかしさ、一般的か個人的か、について主効果、交互作用ともに有意ではなかった。話の内容の難易度について関係性の要因の主効果が有意となった ($F(1, 72) = 5.84, p < .01$)。

つまり、DC群の方がUP群より話の内容が難しいと回答していた。“相手の目を見て話せたか”という質問については、関係性の要因の主効果が有意となった ($F(1, 72) = 6.36, p < .01$)。つまり、交際中の男女が初対面の男女より目をよく見て話せたと答えていた。

3. 仮説の検討

待ち時間中および会話中の相互視の平均値と標準偏差を表1及び表2に示した。会話中の相互視量は、会話開始後2分目から2分間について測定したものを分析した。また総量(%)は角変換したものについて統計処理を行った。

待ち時間中における相互視量では、回数(1分当り)については有意差は認められなかった ($t(36) = 1.47, p < .14$)。総量については、DC群がUP群よりも多かった ($t(36) = 3.77, p < .0006$)。また平均時間についてもDC群がUP群よりも長かった ($t(21.9) = 3.85, p < .0009$)。

次に会話中(2分間)における相互視量では、回数(1分当り)についてはDC群がUP群よりも多かった ($t(36) = 1.88, p < .06$)。総量についても、DC群がUP群よりも多かった ($t(24.5) = 3.00, p < .006$)。さらに平均持続時間についてもDC群がUP群よりも長かった ($t(24.2) = 2.98, p < .006$)。このように、会話中における

表3 初対面及び交際中男女による直視量と発話量の平均値と標準偏差（5分間の会話中）

視線測度	初対面		交際中	
	女性(n = 20)	男性(n = 20)	女性(n = 18)	男性(n = 18)
直視量 (%)	38.69(14.99)	35.18(18.61)	56.01(22.26)	51.22(23.87)
直視回数 (1分当り)	8.38 (2.83)	8.72 (2.23)	7.17 (2.89)	8.00 (1.69)
直視平均時間	2.85 (1.47)	2.52 (1.50)	5.63 (5.23)	4.08 (2.39)
発言中の直視量 (%)	16.19(13.01)	24.06(15.59)	24.34(21.83)	46.06(21.70)
発言中の直視回数 (1分当り)	14.00 (6.47)	15.83 (6.91)	12.43 (8.09)	17.62 (5.43)
発言中の直視平均時間	0.66 (0.36)	0.86 (0.28)	1.10 (0.46)	1.53 (0.55)
聴取中の直視量 (%)	39.61(20.21)	28.23(16.00)	47.99(21.51)	23.53(14.66)
聴取中の直視回数 (1分当り)	11.14 (4.41)	10.15 (3.84)	12.01 (4.05)	9.17 (4.55)
聴取中の直視平均時間	2.26 (1.73)	1.68 (1.03)	2.55 (1.38)	1.58 (0.93)
発言量 (%)	11.15 (7.98)*	14.24(10.14)*	28.17 (6.41)	29.81(13.51)

() 内は標準偏差を示す。 * n = 18

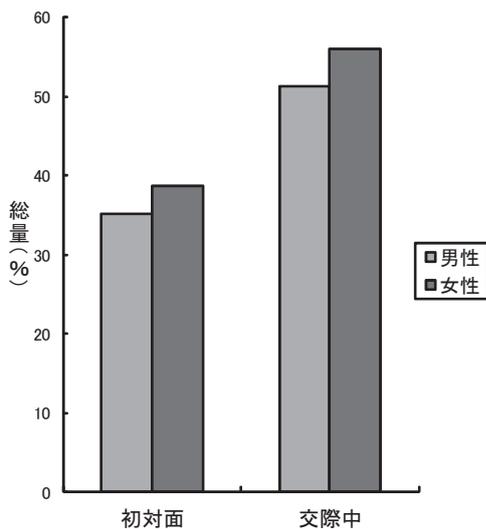


図2 直視総量の平均値

相互視の3つの測度すべてについて仮説1が支持されていた。全会話時間5分間についての直視量の平均値と標準偏差を表3に示した。仮説2と3を検討するため、初対面及び交際中のそれぞれの男性、女性群の直視量の3つの測度について検討を行なった。なお総量(%)は角変換値になおして処理した。この角変換値について、分散分析を行なった。3つの視線測度それぞれについて、関係と性を要因とする2×2の分散分析を施した。さて仮説1は、初対面の男女間に比較して交際中の男女間の直視量が多いということであった。直視総量(図2参照)と

平均時間において関係の主効果が有意となった(総量: $F(1, 76) = 12.42, p < .001$; 平均時間: $F(1, 76) = 9.94, p < .002$)。直視回数については関係の主効果が有意な傾向があった($F(1, 76) = 2.91, p < .09$)。すなわち、初対面より交際中の男女の直視量(総量, 平均時間)が多いことが判明し仮説2が支持された。しかし性の主効果及び関係と性の交互作用は3つの視線測度それぞれについて有意ではなかった。つまり、女性の直視量と男性の直視量の間に有意差は見いだされず、女性の方が男性に視線を向ける量が多いという仮説3は支持されなかった。

4. 発言中及び聴取中の直視量

1) 発言中の直視量

初対面及び交際中のそれぞれの男性群、女性群の発言中の直視量の総量, 回数, 平均時間の測度について検討を行った。なお, 直視総量(%)は角変換値になおして処理した。それぞれについて, 関係と性を要因とする2×2の分散分析を施した。その結果, 3つの測度において性の主効果が有意となった(総量: $F(1, 76) = 12.43, p < .001$; 回数: $F(1, 76) = 5.06, p < .028$; 平均時間: $F(1, 76) = 10.70, p < .002$)。つまり, 男性の方が女性より発言中の直視量が多かった。また総量と平均時間において関係の主効果も有意となった(総量: $F(1, 76) =$

12.32, $p < .001$; 平均時間: $F(1, 76) = 33.20$, $p < .0001$)

2) 聴取中の直視

初対面及び交際中のそれぞれの男性群, 女性群の聴取中の直視量の総量, 回数, 平均時間の測度について検討を行った。なお, 直視総量(%)は角変換値になおして処理した。それぞれについて, 関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。その結果, 3つの測度において性の主効果が有意となった(総量: $F(1, 76) = 15.66$, $p < .0001$; 回数: $F(1, 76) = 3.90$, $p < .028$; 平均時間: $F(1, 76) = 6.04$, $p < .016$)。つまり, 女性の方が男性より聴取中の直視量が多かった。しかし, 関係及び交互作用は3つの視線測度それぞれについて有意ではなかった。

3) 発言中の直視と聴取中の直視の関係

発言中の直視量および聴取中の直視量について, それぞれ3つの測度ごとにt検定による比較を行った。まず, 総量(%)の角変換値については, 聴取中の直視総量が発言中のそれより有意に多かった($t(75) = 2.38$, $p < .02$)。次に平均時間についても, 聴取中の直視平均時間が発言中のそれより有意に長かった($t(75) = 5.83$, $p < .0001$)。また回数については, 発言中の直視回数が聴取中のそれより有意に多かった($t(75) = 5.70$, $p < .0001$)。

4) 発言量

初対面及び交際中のそれぞれの男性群, 女性群の発言総量(%)の角変換値について関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。その結果, 関係の主効果が有意となり($F(1, 68) = 56.77$, $p < .0001$), DC群がUP群より発言量が多かった。性の主効果と交互作用は有意ではなかった。

考 察

Rubin (1970)の研究では強い恋愛感情のカップルが弱いカップルより相互視量が有意に多く, また直視量が多い傾向が確認されている。本研究でも相互視量については, 仮説1の予測通り, 待ち時間, 会話中のいずれにおいても初対面より交際中の男女間の相互視量が有意に多かった。また, 交際中の男女の方が初対面の男

女より直視量が有意に多く, 仮説2も支持された。これは, 実験後質問紙で交際中の男女が初対面の男女よりよく目を見て話せたという回答とも一致していた。視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」が示すように, 好意感情(親和欲求)から生じる強い接近力, 弱い回避力によって, 恋人同士が未知の男女間より直視量, 相互視量が多くなったと解釈される。実際, VTRに収録された交際中の男女を観察してみると, 男女間に親しさ, 遠慮のない馴れ馴れしさ, 開放性, 気楽さなどが感じ取られた。そして, 相互視には微笑が伴っていることが多かった。相互視は, 親密な感情を直接表現するチャンネルの1つと考えられる。したがって, 男女が親密感を共有しない時に, 相互視を維持することは極めて困難であろう。次に, 未知の男女同士では, お互いが遠慮がちで, 初対面の相手と視線を合わせるのはいかにも照れくさいという感じがみられた。しかし, 照れ微笑は多くみられた。未知の男女間では, 相互視を長く持続するほどの親しさはないのであろう。さらにVTRの観察によれば, 好意感情や恋愛感情を抱いている相手に対しては接近し, 頻繁に働きかけようとし, 視線を多く向け, 話しかけ, 身体を相手の方へ向け, そして相手に多く接触しようとする行動が多く見られた。Rubin (1970)の研究では強度の恋人同士の相互視量は約31%で, 本研究とほぼ同量である。また, 未知の男女の相互視量は約22%で, 本研究の未知の男女間の15%より多い。恋人同士の相互視量に関しては日米の差はないようだが, 未知の男女間の相互視量については, 米国の被験者の方が幾分多いようである。これは, 初対面同士ではあまり多く視線を向け合わないという日本人の視線傾向が反映しているのかもしれない。

次に, 男女によって直視量は違いがあるということは確認できず, 仮説3は支持されなかった。一般に, 男性より女性の方が相手によく視線を向けることが繰り返し指摘されている(Exline, 1963; Rubin, 1970; Mulac, Studley, Wiemann, & Bradac, 1987)。しかし本研究では, 初対面および交際中の各条件における男女間に, 直視量(回数, 平均時間)の有意差は見いだせなかった。さて, 対面相手が同性か異性

か（性の組合せ）も視線行動に影響を及ぼすことが知られている（Hall, 1984）。本研究は対面相手が異性であり、対面相手が異性の場合には、同性同士と比べると直視量が全体的に多めになっている。つまり、女性と男性のペアが女性同士のペアより視線活動性（直視量の多少）がより活発になっている（視線活動性が高まっている）ことがうかがえる。

なお男女によって直視量に違いは見いだされなかったが、視線量を発言中と聴取中に分けて検討すると性差があった。つまり、聴取中の直視量は男性より女性が多く、発言中の直視量は女性より男性が多かった。Hall (1984) は、15の研究のうち9つ（60%）において、女性が聴取中に多く相手に視線を向け、男性は発言中に相手に多く視線を向けるという結果が示されていることを報告している。本研究の結果もこれに一致している。聴取中に女性の直視量が男性より多いのは、親和的で、熱心に男性の話を聞くという女性の性役割行動としても説明できるかもしれない（Hall, 1984; Kleinke, 1986）。また、聴取中の直視は情報収集機能を示しているのかもしれない（市河他, 1981）。次にExline & Winters (1965) は、次のような事例で発言中の視線の機能を示唆している。「パーティなど多くの人がいる所で、あなたに話しかけながらあなたにだけ視線を向けている人物Aとあなたに話しかけながらも他の人々に視線をキョロキョロと向けている人物Bを比べると、どちらの人物があなたに真の好意、関心を抱いているのか（p.349）」。人物AがBよりあなたに好意をもっていることから推察できるように、発言中の視線は他者に対する好意感情を正確に示す指標ではないかと示唆している。またExline et al. (1975) は、実際の直視量の多少とは別に、聴取中より発言中に相手に多く視線を向ける者は、相手を支配、統制しようとする欲求が強いと示唆している。Noller (1984) は、適応度の低い夫婦ほど、発言中に相手（配偶者）に向ける視線量が多いことを報告している。うまくいっていない夫婦はお互いに話を聞いて理解し合うというよりも、自分の発言が相手にどういう効果をもたらしているかを、話しながら相手を見て、常に監視（monitor）し支配しよう

とする動機の表れであると解釈している。特に、否定的なメッセージの場合に発言中の直視量が多くなったという。これは、視線に敵対的な意味がこめられ、否定的なメッセージに対する相手の反応を監視する傾向ではないかと示唆している。しかし適応度の高い夫婦間では、夫は発言中より聴取中に妻の方に多く視線を向けているという。つまりこれは相手と競争したり、相手を支配しようとする傾向がないことを示していると述べている。このように、発言中の視線は、態度の表出や会話の調節機能を果たしているのかもしれない（市河他, 1981）。

視線の量的研究当初から、発言中と聴取中の直視量に違いがあることが知られている（Nielsen, 1962）。まず、聴取中の直視量が発言中の直視量より多いことを見いだされている（Exline, 1963; Nielsen, 1962; Exline et al., 1965; Kendon, 1967; 吉田・飯田, 1981）。本研究でも同様に、聴取中の直視量（総量、平均時間）が発言中の直視量より多いことが確認された。聴取中の直視量が発言中の直視量より多いという理由はいくつかあげられている。まず、人は発言時には聴取時以上の注意集中を必要とするので注意が散漫になるのを防ぐため、視線を相手から外して考えるために、そのような認知努力の違いが視線量の差になると考えられる（注意散漫仮説）。2つ目の理由として、Exline et al. (1965) は、会話内容が個人的で恥ずかしい内容である場合、相手からできるだけ自分の感情を隠そうとする動機が働き、発言中の視線量が減少するとも考えられている（隠蔽仮説）。しかし他方、発言中の直視量が聴取中の直視量より多いという結果もある（Noller, 1984）。一般的に人は発言中より聴取中に多く相手に視線を向けるという説が、アフリカ系米国人を被験者とした研究（LaFrance & Mayo, 1976）や地位要因を考慮した研究（Ellyson, Dovidio, & Corson, 1980; Ellyson, Dovidio, Corson, & Vinicur, 1980）では必ずしも妥当しないことが報告されている。Mulac et al. (1987) は、発言中の直視と聴取中の直視についてのデータはまだ十分に収集されているとはいえないので、2つの測度がどのような機能を持っているのかを決めるのは現段階では時期

尚早であろうと述べている。今後更にこの2つの視線測度を検討する必要がある。

最後に、発言量を検討した結果、交際中群が初対面群より発言総量が多かった。これは、発言量は好意感情の指標と考えられる（ボンド・白石, 1973）ので、好意感情のより強い交際中群の発言量が多くなったと考えられる。

引用文献

- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation *Sociometry*, **28**, 289-304.
- Beier, E. G. & Sternberg, D. P. (1977): Marital communication. *Journal of Communication*, **27**, 92-97.
- ボンド, M.H., & 白石大介 (1973) : 面接者の「姿勢」と「地位」が被面接者に及ぼす影響—non-verbal communicationの研究 実験者社会心理学研究, **13**, 11-21
- Coutts, L. M., & Schneider, F. W. (1975): Visual behavior in an unfocused interaction as a function of sex and distance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 64-77.
- Ellsworth, P. C., & Ludwig, L. M. (1972): Visual behavior in social interaction. *Journal of Communication*, **22**, 375-403.
- Ellyson, S. L., Dovidio, J. F., Corson, R. L. & Vinicur, D. L. (1980): Visual dominance behaviour in female dyads: situational and personality factors. *Social Psychology Quarterly*, **43**, 328-336.
- Exline, R. V. (1963): Explorations in the process of person perception: Visual interaction in relation to cooperation, sex and need for affiliation. *Journal of Personality*, **31**, 1-20.
- Exline, R. V., & Winters, L. C. (1965): Affective relations and mutual glances in dyads. In S. S. Tomkins & C. E. Izard (Eds.), *Affect, cognition, and personality*. New York: Springer.
- Exline, R. V., Ellyson, S. L., & Long, B. (1975): Visual behavior as an aspect of power relationships. In P. Pliner, L. Kramer, & T. Alloway (Eds.), *Advances in the study of communication and affect*. Vol.2. Nonverbal communication of aggression. New York: Plenum. Pp. 21-52.
- Fehr, B. J., & Exline, R. V. (1987): Social visual interaction: A conceptual and literature review. In A. W. Siegman, & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal behavior and communication*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 225-326
- Foot, H. C., Chapman, A. J., & Smith, J. R. (1977): Friendship and social responsiveness in boys and girls. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 401-411.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 (1983) : 日本版Love-Liking 尺度の分析 広島大学総合科学部紀要Ⅲ 7巻, 39-46.
- Goldstein, M. A., Kilroy, M. C., & Van de Voort, D. (1976): Gaze as a function of conversation and degree of love. *Journal of Psychology*, **92**, 227-237.
- Guerrero, L. K. (1997): Nonverbal involvement across interactions with same-sex friends, opposite-sex friends and romantic partners: consistency or change? *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 31-58.
- Hall J. A. (1984): *Nonverbal sex differences: Communication accuracy and expressive style*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Harper, R. G., Wiens, A. N., & Mattarazzo, J. D. (1978): *Nonverbal communication: The state of the art*. New York: John Wiley & Sons.
- 市河淳章・車谷ひとみ・香西貴代 (1989) : 会話場面における非言語行動の分析—性、対人距離、2者関係の影響について—香川大学教育学部研究報告第Ⅱ部, **39**, 137-147.
- 飯塚雄一 (2005) : 二者間における視線行動の表出に及ぼす対人感情の影響—視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」の検討—広島大学大学院教育学研究科博士論文 (未公刊) .
- Kendon, A. (1967): Some functions of gaze

- direction in social encounters. *Acta Psychologica*, 26, 1-47.
- Kleinke, C. L. (1986): Gaze and eye contact: A research review. *Psychological Bulletin*, 100, 78-100.
- La France, M., & Mayo, C. (1976): Racial differences in gaze behavior during conversations: Two systematic observational studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 547-552.
- Mulac, A., Studley, L.B., Wieman, J.M., & Bradac, J.J. (1987): Male/Female gaze in same-sex and mixed-sex dyads. *Human Communication Research*, 13, 323-343.
- Nielsen, G. (1962): *Studies in self confrontation*. Copenhagen: Monksgaard.
- Noller, P. (1984): *Nonverbal communication and marital interaction*. Oxford: Pergamon Press.
- Pennington, D.C., & Rutter, D.R. (1981): Information or affiliation? Effects of intimacy on visual interaction. *Semiotica*, 35, 29-39.
- Rubin, Z. (1970): Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.
- Russo, N. F. (1975): Eye contact, interpersonal distance, and the equilibrium theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 497-502.
- Rutter, D. R., & Stephenson, G. M.(1979): The functions of looking: Effects of friendship on gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 203-205.
- 和田実 (1989) : 二者関係、対人距離および話題が非言語的行動に及ぼす影響 - 現実の二者関係にもとづいて - 心理学研究, 60, 31-37.
- White, G. T. (1975): The mating game: Nonverbal interpersonal communication between dating and engaged college couples. Paper presented at the meeting of the Western Psychological Association, Sacramento. (cited in R. G. Harper, A. Wiens, & J. D. Matarazzo (Eds.), *Nonverbal communication: The state of the art*)
- 吉田富二雄・飯田哲也 (1981) : 自然場面における視線行動の分析 実験社会心理学研究, 20, 109-118.

Effect of Romantic Love on Visual Behavior

Yuichi IIZUKA^{*}, Yuri HASHIMOTO and Kazuhiro IIZUKA^{**}

Abstract : We studied gazing in the context of spontaneously occurring relationships. The subjects' visual and verbal behaviors were recorded by four observers stationed behind a one-way mirror. The timing of gaze and utterance were accomplished through the use of a Behavior Analyzer controlled by a computer. 18 dating couples were compared with 20 pairs of unacquainted subjects on amount of eye contact as well as time spent in gazing one another during conversation. The dating couples spent more time gazing at one another than did unacquainted couples in this situation. Dating couples of both sexes tended to look at their partners more often than would unacquainted couples. The prediction that women would spend more time looking at the men than men would spend looking at the women was not supported.

Key Words and Phrases : romantic love, dating couples, unacquainted couples, gazing, eye contact

^{*}The University of Shimane Junior College (Professor Emeritus)

^{**}Aichi University of Education